

(1) 私は「ワイレブ人」 2020 年 3 月 7 日刊行

日本で出身地を聞かれると困ってしまう。生まれた場所とその時の住所が異なり、さらにその後何度も引っ越しをしていると、何をもって「出身地」としていいのかがわからない。

フィジーでは、父親の出自イコール自分の出自と、定義がはっきり決まっている。ナタカラ村で生まれ育った知り合いは、父方の祖父がトンガから来たので父も自分も「トンガ人」とはいえ、トンガ語を話すわけでも、トンガの文化を知っているわけでもない。首都スバで出会う人たちも同じこと。ヤサワ諸島テジ村出身と聞いて、テジ語の調査ができる、しめしめ、と思っても、よく聞いてみれば、スバ生まれのスバ育ち。テジのことばはよくわからないといわれてがっかりする。

例外は外国人研究者。たいていは最初に調査に入った村の言語や文化を身につけるから、最初に育ててもらった土地が出身地となる。かくて私は長い間「カンダブ人」と呼ばれていた。カンダブ島の中であちこち動きまわるようになると、今度はさらに正確に村の名称をとり「ワイレブ人」になった。そして、首都でもどこに行っても、ワイレブ語で話す。日本でいえば、外国人が関西弁で話すようなもの。最初は驚かれるが、自分では、地域言語の推進に一役かっていると自負している。



「トンガ人」の子どもを抱いている「ワイレブ人」の筆者（左）＝フィジーで 1992 年、Kitione Leqeti 撮影

(2) 私達って誰のこと？ 2020年3月14日刊行

日本語では主語を使わずに話をするができるが、フィジー語の文には必ず「私は」とか「あなたは」を表す代名詞が入る。代名詞の数は15個にのぼり、英語と違って名前などと入れ替えることはできない。

数が多い理由は、単数と複数に加え、2人を示す「双数」、3人以上のグループを指す「少数」があるからだ。三人称でいえば、「彼は」「彼ら2人は」「彼ら数人は」「彼ら大勢は」で異なる代名詞を使う。さらに、「私たち」という時には、話し相手を含む包括形と含まない除外形がある。前者で双数の場合には「私とあなた」、少数の場合には「私とあなたと誰か」、後者で双数の場合には、「私とあなた以外の誰か」という意味になる。

数だけ見ると大変そうだが、使えるようになるととても便利だ。「さあ行こう！」というときに包括形を使えば「あなたも来なさい」、除外形なら「あなたはお留守番」という意味になる。直接言わずとも、相手に自分の意図を伝えることができる。慣れてしまうと、英語や日本語がとても不便に感じられる。かくてオセアニア言語話者の間では、「私達除外形2人はね……」などと、変な日本語会話が聞かれることになる。そして、2言語併用社会なら、こんな時に文法要素の借用が起こるのだろうなあ、と想像する。



「僕たち（除外形・少数）海に行くよ」ワイレブ村で1992年7月21日、著書撮影

(3) これ、あげる！ 2020 年 3 月 21 日刊行

フィジー語は所有表現が豊富だ。「あなたの」というだけでも 4 種類あるが、そのうちの三つ、kemu、memu、nomu は順に、食べ物か飲み物か、その他の一般的な所有物かによって使い分けられる。魚に kemu をつければ「あなたが食べる魚」、nomu なら「あなたの所有する魚」。あなたが捕まえたものかもしれないし、売っているものかもしれない。ものの状態によっても使い方が変わる。緑で硬いマンゴーは食べ物形 kemu、熟したオレンジ色の柔らかいものは飲み物形 memu。いずれの場合にも、売り物の場合はもちろん一般所有形で nomu。これらの形は、いずれも mu の部分が「あなた」を表しており、「私の」という場合なら qu になる。

さて、村の集団漁労でのこと。集まった魚を指しての獲りもの自慢は、一般形を使って「これ noqu !」「それ noqu !」とにぎやかなこと。分配する段になると今度は食べ物形になり、「これ kequ!」「それ kequ!」と、またにぎやか。そのうち一人が「これ kemu!」と、自分のとり分の中から私に魚をくれた。その瞬間、私の頭の中で意味と形と用法がはじめて一致した。「これ、あげる！」というのが教科書的な用法だけれど、この場合は ke 形だから「食べてね」という意味なんだ！ 言語には使って暮らしてみてもわかることが本当にたくさんある。



集団漁労の日に獲れた大きな熱帯魚＝カンダブ島で 2019 年 3 月 8 日、著書撮影